

図書館だより

No.84 July, 2014



目次

巻頭エッセイ	私の読書暦	制御情報工学科	綾部 隆	1
読書のすすめ	おすすめの本など	電気電子工学科	嶋田 英樹	2
	明治時代の英語教科書のお話	一般科目文科	安部 規子	3
	専門馬鹿よりマシ?	一般科目理科	黒飛 敬	4
私の一冊		各学科学生	6名	5
リレー連載	日本の船の歴史に関する書籍	機械工学科	岩本 才次	7
平成25年度後期図書館利用状況				8
Information	編集後記			9

巻頭エッセイ

私の読書歴



制御情報工学科 綾部 隆

困ったものである。私はあまり本を読まない。昔から国語、特に小説が苦手であった。よく国語の問題で、小説の一文があり、「作者の心情を次の中から選べ」という選択問題があった。私が高校生の頃は、答は4択でなく、5択であった。その中の2つは「性格異常者をチェックするため」としか考えられないような答、1つは私でも「これはどうも違う」とわかる答、最後にもっともらしい答が2つ残った。そして、いつも間違った方の答を選んでいて、素直に考えれば良いものを「待てよ。こちらの答は芸がない。」と深読みしていたのかもしれない。しかし、「実際のところ、作者がどういう心情で書いたかわからないじゃないか？」という疑問は今でも残っている。ちなみに、ある予備校が司馬遼太郎に「ここはどういう心境で書かれたのですか？」と問い合わせたところ、彼の回答は「わかりません」。

そんなわけで20年程前に「図書館だより」の原稿を書いて以来、ひたすら執筆依頼を逃げ回って来た。しかし、ついに捕まってしまった。それもWANTEDの写真付きで。仕方がない。そんな私でも、少しは本を読んできた。その中から印象に残ったものをいくつか挙げてみる。

さて、最初の本である。正直に言おう。私は「赤毛のアン」が大好きである。「えーっ!?!」、「…プw」と思われるだろうが、これまでに十数回、いや20回近くは読んだだろう。最初に読んだのは大学2年、前期定期試験の前で憂鬱な気分になっていた時に図書館で何げなくこの本を手にとって読んでみたら見事にはまってしまった。原作者はカナダのルーシー・モード・モンゴメリ、訳者はNHKの朝の連続テレビ小説「花子とアン」でおなじみの村岡花子である。この小説は映画やアニメにもなっているが、小説の方が絶対に面白い。少女向けの小説だから甘い所もあるが、ちょっぴり皮肉を含んだユーモアがおかしくて、泣かせる場面もある。しかし、私がこの小説を特に気に入っているのは人物描写や自然描写が見事な点である。原作の英文は読んだことがないが、別の訳者による本は途中で投げ出したから、村岡花子の

訳が魅力的なのだろう。

次に印象に残ったのは、司馬遼太郎の小説である。「燃えよ剣」は新選組の冷徹な副長であり、最後は函館の五稜郭から単騎で敵前に突っ込んで死んでいった土方歳三の一生を描いた悪漢小説である。そして、「竜馬がゆく」。それまであまり知られていなかった坂本竜馬の名を広く日本人に知らしめたこと、幕末の志士、薩長の英雄、朝廷、勝海舟などの幕臣、島津斉彬、松平春嶽などの名君が大政奉還までにどのようにかかわってきたかを作者の歴史観を交えて書かれている点でこの小説は価値があると思う。

「項羽と劉邦」も印象に残った。しかし、最近では司馬の小説をあまり読まない。どうしてかと言うと、彼の歴史観が少々目障りになってきたからである。それは司馬自身の歴史観であって、歴史の真実は違うかもしれないと思うようになってきたからである。もっとも、何かの本で彼が「幕末に、何と佐賀藩は受験勉強をやっていたんです。あの佐賀、がですよ！」と書いていたのを読んで「くそーっ！そこまで書かんでも…」と腹を立てたのも一因だが。

3番目に印象に残ったのは、小説ではなく、「物理革命はいかにしてなされたか？創造への道」(ブルーバックス、菅野礼司 著) という解説書である。絶版になっているから中古本を探すしかないが、本校の図書館にも1冊あるはずである。この本の良い点は、ギリシア哲学→自然哲学→古典物理学→相対性理論・量子力学という物理学の歴史を通じて、既成概念がどのように打ち破られていったか、そして新しい物理概念がどのように打ち立てられていったかを丁寧に解説していることである。

高校時代に読んだ教科書は、考え方重視で公式の羅列が少なかった点で良かった。が、あまりにも説明が不足していた。物理の概念や法則が当然の事実のように書かれていて、「何度読んでも理解できない自分は馬鹿なのか…」と劣等感を持ったものである。大学に入ってこの本を知り、物理学を少しだけ理解できた。また、物理と数学は似ているが、考え方が違うこともわかった。興味ある人は一読を薦める。

特集 読書のすすめ

おすすめの本など



電気電子工学科 嶋田 英樹

皆さん、はじめまして、本年度一年間高専間教員交流のため電気電子工学科でお世話になります嶋田英樹です。聞くとところによれば、例年、“図書館だより”の“特集読書のすすめ”は、新任教員が執筆するとのことで、今回担当させていただくことになりました。

学生の皆さんは、スマートフォンでゲームばかりしていないで本を読んでいますか？

最近では、タブレット端末やスマートフォンの普及に伴い、書籍は、紙媒体から電子媒体へと変化してきています。これによって、多くの書籍を持ち歩くことが可能となり、いつでも、どこでも手軽に読書ができる環境となっています。また、電子書籍は、ネットを通して手軽に購入が可能で、一昔前の読書環境と比較すれば、格段に場所、時間を選ばずに容易に本を読むことができるようになっていますので、本を読んでみたらどうでしょうか？良いアイデアが浮かぶかもしれません。

さて、本稿を書くにあたり、これまでの“読書”に関して思い出してみましたが、大学時代からこれまでの約25年間は、専門書や研究に関連する書籍等のページを捲ること(必ずしも読むのではない)が多く、ゆっくり時間を割いて本を読んでいないような気がします。また、25年以上遡って考えてみると、文学・歴史ものの書籍を読むことは少なく、主に推理小説ばかりを手にとっていました。以下ではこれまでに読んだ本の中から、私のおすすめ本として紹介します。

○パンドーラの遺産

～人類に残された最後の未知エネルギー～、井出治著

この本は、1996年に出版されたもので、石油などの化石エネルギーの代わりとなるクリーンエネルギーを取り出すことに成功した話です。具体的には、未知エネルギーの導入として、未確認飛行物体のエネルギー源等のオカルト的な内容に触れながらも、科学の常識ではありえない効率100%を超える、つまり“エネルギー保存則”では説明できない効率のモーターを開発し、その功

績をアメリカの物理学会誌である Journal of Applied Physics へ投稿し、掲載されるまでの過程を記したものです。本書では、“未知エネルギー”という言葉を使い著者が開発したモーターで得られる未知の起電力の可能性について、理論・法則を示し、実際に行った実験結果を詳しく検証していく過程が示されていますので、皆さんの実験レポート作成や卒業研究の進め方・卒業論文の作成等に参考になるのではないかと思います。

○美味礼賛、海老沢泰久著

この本は、50年ほど前にハヤシライスやオムライスが西洋料理と呼ばれていた時代に、本場のフランス料理とはどのようなものかを日本に浸透させる基礎を築き上げた辻調理師専門学校校長 辻静雄氏の自伝的小説です。また、辻氏の周りの人間関係、フランス料理のみならず日本料理等の文章表現が素晴らしく、料理に興味がない人でも読み応えは十分にあると思います。

辻氏は、外国人として初のフランス最優秀料理人賞(M.O.F)を受賞した人物ですが、料理人ではなく料理研究科(ガストロノミー)と呼ばれ、大手新聞社の記者を経て義父が経営していた日本料理学校の副校長となり、調理師専門学校の校長となった人物です。“誰だって最初から知っている人はいない。大切なのは、学ぶという気持ちを持っているかどうか”という言葉通り、全く料理の知識がない状態から、当時のフランス各地の最高級料理店のみならず100箇所以上の店で料理を食べまくり、舌に味を記憶し、その味・料理手順を学生へ教え、日本各地のホテルや料理店へ卒業生を輩出しています。

以上、科学、料理と分野が異なる書籍を紹介しましたが、どちらの書籍にもいえることは、“信念を持って、目標を持って、何をすべきか考えて行動している”点です。自分の目標を再確認するためにも、ご一読いただければと思います。

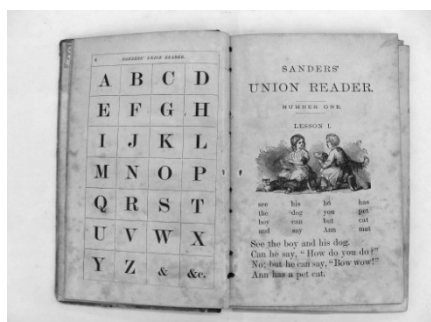
特集 読書のすすめ

明治時代の英語教科書のお話



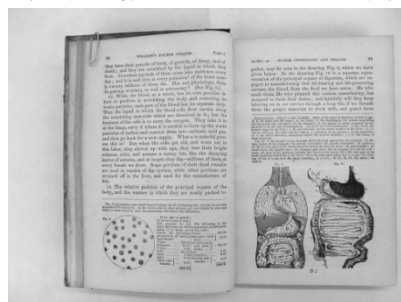
一般科目（文科系） 安部 規子

みなさん、こんにちは。4月に本校一般科目に着任しました安部規子です。今回は、私が興味を持っている明治時代の英語教科書についてご紹介します。私はある時、100年以上前に日本の旧制中学の生徒たちが使っていた英語教科書を見る機会があり、その表紙や挿絵の美しさに驚きました。以下の写真は、上が「ロングマン」下が「サンダース・ユニオン」という教科書の第1巻第1課です。



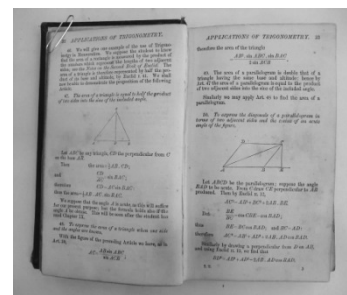
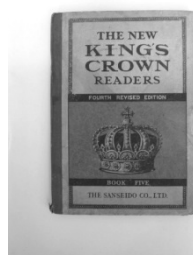
現在中学・高校では日本人生徒のために編纂された英語教科書が使われていますが、明治時代に日本人が最初に使ったのは欧米の小学校の国語教科書でした。当時の生徒は、小学校1年生の舶来教科書から英語を学び、言語と同時に欧米の文明をも吸収していったのです。第1巻は少年少女の生活が中心で、かわいい犬や猫がよく描かれています。1巻から進んでいくにつれて、字はどんどん小さくなり、内容も日常生活に関するものより、文学、哲学、生物、物理など難解なものが増えてきます。欧米の子供たちが使うための本ですから、文法の解説などはなく、日本人の生徒も膨大な量の英文にふれるうちに自然と単語や文法を身につけていったと考えられます。

以下は「ウィルソン」という教科書の第4巻の血液や内臓に関する課で、難解な内容になっています。



当時の生徒は、洋行帰りの先生や宣教師について学んだ人を除けば、発音は上手とは言えなかったでしょうが、それでも努力を重ね、それなりに英語で話すこともできたのです。

英語を学ぶ生徒は限られたエリートであったとは言え、舶来教科書ではドロップアウトする人もまた多かったために、日本人の手による日本人のための英語教科書が執筆されるようになりました。下左は昭和初期の代表的な国産英語教科書で神田乃武という人が書いたものです。



今日私たちの周りにはあふれるほどの音声教材や映像がありますが、英語がなかなか上達しないという悩みは解消されていません。現在英語を英語で教えることが奨励され、他の教科も英語で教える試みがなされています。この先進的と思われる試みも実は明治時代にすでに行われたものであったのです。上右は明治時代の数学の教科書で、やはり英語で書かれたものです。生徒たちは数学を理解するためには英語がわかる必要がありました。触れる英語の量と切実なニーズ、そして何よりも情熱、この3つが明治時代の英語学習を支えていたように感じられるのです。

特集 読書のすすめ

専門馬鹿よりマシ？



一般科目（理科系） 黒飛 敬

梅雨に入った。赴任したばかりで、九州で迎えたはじめての梅雨である。日本に住んでいるのだから仕方がないことではあるが、やはり鬱陶しいことには変わりはない。生まれて此の方西日本に住みつづけているので時期はほとんど同じ。四月に新人と親交を暖め、若干の環境の変化と折り合いをつけて、「さあやるぞ！」となった頃に梅雨はやってくる。この原稿を作成している今このときも、窓の外は雨模様であり、止む気配はない。困ったものである。何が困ったのか。よく考えてみると、私は雨の日は嫌いなわけではない。寧ろ風情があっていいじゃないかと思う。濡れることを厭わなければ、雨の日の散歩などは乙なもので、普段とは違う街並みにしとしと聞こえる雨音だけ。そんな情緒ある日本の風景は、きっと私の中の大切な心象の一つなのだと思う。では、私にとって「困った季節」なのには全く別の理由があるということになる。湿気は物質の保存にとって大敵である。特に吸湿性の高いものは、この時期を超えると必ず劣化する。化学者の端くれを自認している私は、この時期の化学物質の不安定性に鬱陶しさを感じているのだった。化学者は実験してなんぼである。化学実験といっても、学生実験でやるような水溶液を混ぜて化学反応を起こすのではなく、できる限り水と空気を排除して、外界の影響を遮断することではじめて起こる化学反応というものがある。特に有機物質を研究対象にしていれば、湿気は大敵である。研究室ではじめてこの手の化学反応を経験する学生は苦勞する。うまく行くとときと行かないときがあるのだ。梅雨にはうまく行かないが増えるので、実験には非常に気を使う。そんなワケで梅雨のイメージは最悪なのだと思う。そう考えると職業病気味なのかなと思ったりする。「専門分野に偏らないためにいろんな本を読みなさい」とよく言われたものだけど、それを言うと学生時代の先輩に「何もわからないよりは専門分野に深く精通しているほうがマシ」と言われたものである。斯くして今の私は何もわからないけど専門分野に偏った人間になっている。

そんな私が読書について何か語れと言われてもなかなか思いつかない。どちらかというところと広く浅く読む方である。ある程度歳をとると同世代の人がどんな生き方をしているかに興味が湧いてきて、最近では同じくらいの時代を生きてきた著者の話に目を向けることが多くなった。

最近読んだ本の中から印象に残ったものとして、「直感力」（羽生善治著、PHP新書）がある。ご存知の通り羽生氏は最も注目を集めるプロ棋士の一人である。私が高校時代にはすでに活躍されていたのではなかったかと思う。若くして年配のトップ棋士たちに勝っていく様は痛快で、格好良かった。やはり将棋はロジックを研究し尽くした「パソコン世代」が強いのかと思ったものである。そんな「羽生さん」も40代となり計算力を武器に突き進む若手世代から直感を頼りにするスタイルへとシフトしているという。ここで言う直感とはもちろん多くの経験がもとになっており、ある局面での判断に100%の自信を持てるのだという。私には到底至れない境地であるが、この直感力を磨くさまざまな局面を著者の棋士生活から紹介してくれる内容となっている。自分を信じることができるか、というか、いかに自分を信じられるようになるか、といった感じだ。私の生活からはかけ離れたシチュエーションも多いが、「なるほどな」と思ってしまうのだ。

その他、立場的に紹介してみたい本として、「CHONSの化学」（崎川範行著、三共出版）を挙げたい。と言っても、もう再版されていないのだが、学生時代にちょっとした読み物として読んだものだ。生体を構成する基本元素であり、私たちに最も近い五つの元素に絡めた読み易い化学の本である。

読書家ではないので、普段は専門分野に偏りがちであるが、様々な価値観を与えてくれるので、無駄な時間になったとしても読書は良いものである。因に、今読んでいる「村上海賊の娘」（和田竜著、新潮社）は面白い。梅雨の鬱陶しさを忘れてしまう。私も少しはマシになれるだろうか。



私の一冊



瀧本 哲史 著

僕は君たちに武器を配りたい

講談社

これから社会に出ていく高専生にオススメしたい本です。この本は様々な例をあげ、私達の抱える不安や現実を明らかにし、生き抜くヒントをくれる本です。私もドキッとしますが、文中の「自分の頭で考えない人はカモにされる」という言葉があります。これは正しいと思います。机上論でなく実学ですので、ぜひご一読ください。

(機械工学科5年 石橋 典子)

【図書館所蔵情報】 購入予定

本書は、これから社会に旅立つ、あるいは旅立つたばかりの若者が、非情で残酷な日本社会を生き抜くための、「ゲリラ戦」のすすめである。

僕は君たちに
武器を配りたい

瀧本 哲史

講談社

東野 圭吾 著

ダイイング・アイ

光文社文庫

主人公の雨村慎介は何者かに襲われ、頭に重傷を負う。犯人の人物職人は、慎介が交通事故で死なせた女性の夫だった。怪我の影響で事故についての記憶を失った慎介が事故について調べ始めると、周囲の人間たちは、不穏な動きを見せ始める。誰が嘘をつき、誰を陥れようとしているのか。

被害者の無念と加害者たちの打算、欲望に踊らされる人間を描く東野圭吾の傑作長編です。この小説は、交通事故の怖さをとても感じることができて、ミステリーとしてもとても面白い作品なので是非一度読んでみてください。

(電気電子工学科3年 伊瀬知 尚宏)

【図書館所蔵情報】 913 || H || 97



森見 登見彦 著

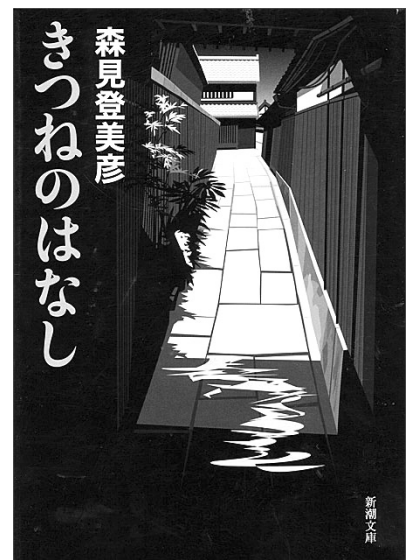
きつねのはなし

新潮社

四畳半神話体系からその本の作者を知り、そこからこの本を見たときに興味を持ち手に取った。そして開いてみたところ、またも京都が書かれていた。この作者の本をいくらか読んだが、それらはすべて京都の中で行われていた。書名の通りきつねやら人魚やらいたちのような妙な獣やらが本の中に出てくる。この本にはいくつかの短編がはいっているのだが、それらにはいくつか共通した言葉が出ておりてっきり同じものだと思っていると少し違い、話の中でもたまされたようで、なんだか煙に巻かれた気分になった。

(制御情報工学科3年 鬼丸 直也)

【図書館所蔵情報】 913 || Z-M || 27





私の一冊



橋本 紡 著
空色ヒッチハイカー

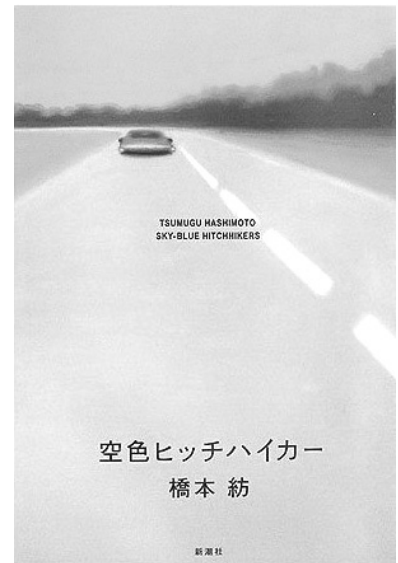
新潮文庫

人生に一度だけの18歳の夏休み。受験勉強を放り出して、川崎→唐津へ七日間のドライブ。兄貴の残した1959年製キャデラックに乗って、偽の免許証を携えて旅に出る。助手席に謎の女の子を乗せ、営業マンやお爺ちゃん、日本中を旅しているおじさん等、様々なヒッチハイカーを拾いながら。旅の中で出会う人々と関わり、大人になろうとする少年のひと夏の物語。

この小説では、『ファンダンゴ』という映画がお兄ちゃんと少年の仲の良さや、物語の鍵として出てきます。この本に興味を湧いた方は、小説を読んだ後にぜひ観てください。兄貴とお兄ちゃんを使い分けている理由もぜひ小説で。

(生物応用化学科3年 中尾 元洋)

【図書館所蔵情報】 913H||99



アンドレ・モーロワ 著 高野弥一郎 訳
フランス敗れたり

ウェッジ

本書では、第二次世界大戦初期において世界有数の国力を誇ったフランスが何故あも呆気無くナチス・ドイツに敗北したか、その経緯と原因が当事者の視点に沿って綴られています。第一次世界大戦の爪痕、遅々として進まない軍備増強、思うように舵を取れない政治家達、そして祖国が置かれた危機的状況に気づかない国民……。私達にはおぼろげに、または歪んで見えなかった、戦間期におけるフランスの置かれていた状況が、この本を読めば鮮明に見えてきます。戦間期から第二次世界大戦初期の様子を勝利したナチス・ドイツの視点からではなく、フランスの視点から見たい、と言う方にお勧めの一冊です。

(材料工学科4年 原野 知之)

【図書館所蔵情報】 購入予定



村上 雅人 著
はじめてナットク! 超伝導 原理からピン止め効果の応用まで
講談社

この本は最近話題のリニアモーターカー等に利用されている超電導現象を対話形式で解説したものです。この本の著者である「雅人」が超伝導を知らない学生や自分の甥に対して超伝導を紹介し、そこから彼らの抱く様々な疑問に答える形で議論が展開されます。そのため、超伝導について素人である私は作中の学生が抱く疑問に共感し、先生の説明に学生同様感心しつつ、知識を得るだけでなく、物語としても楽しんでいました。内容も導入的な部分から専門的な部分まで幅広く扱っており、入門書としては十分役に立つものだと思います。楽しみながら超伝導を勉強したい、勉強する為の予備知識がほしい、という人にお勧めの本です。

(物質工学専攻科1年 大石 和希)

【図書館所蔵情報】 B-B||B||1265



リレー連載「古典への誘い」

日本の船の歴史に関する書籍



機械工学科 岩本 才次

「日本の船の歴史」といっても、専門家以外ほとんど馴染みが薄いだらうと思われる。

西洋のバイキング船やカティースークなどをたまにテレビやポスターで目にするのはあっても、日本の船を目にするのはめったにないであろう。弁財船（べざいせん）、通称千石船などは耳目にする数少ない日本の船である。普段話題にもならない船舶は、今や世界の物資輸送量の95%以上を担い、世界の産業活動にはなくてはならないものになっている。

世界の船の歴史は古く、エジプトでは紀元前2500年には、クフ王のピラミッドの横から出土した全長42mにも及ぶ「太陽の船」が造られているから、構造船の始まりがどこまで遡るか想像もつかない。

エジプトには遠く及ばないが、日本の船の歴史も縄文式文化時代以来、約一万年の歴史を有している。しかしそれは長く割舟（丸木舟）の時代が続き、割舟に船側板を取り付けた、いわゆる準構造船が出現するのは紀元前後の弥生式文化時代中期ごろと言われている。構造も建造方式も規模も異なるが、「太陽の船」と同じような構造船様式の船が日本で建造されるようになったのは、室町時代中期、1400年代半ばである。今から遡ること600年にも満たない。

彼我のスケールの違いには全く驚かされるが、日本の構造船は他国の船にはない特徴がある。それは船体が梁と板から構成される、「棚板造り」と呼ばれる構造であることである。西洋の船は一般に、哺乳類動物の胸部と同様に、竜骨と肋材、それに板を張る方法を用いる。現代造船法の基本はこれである。

さて、前置きが長くなったが、これからいよいよ本題に入る。

日本における本格的な船の歴史研究は、明治以降と比較的若い。古代、中世の船については、発掘された遺物や古文書、絵巻物などに頼るほかないが、近世に入って、金沢兼光が和漢の書籍から船に関連する語彙を集積した「和漢船用集」が出版された。現在の日本における船の歴史研究はこれを契機とすると言っても過言ではない。昭和に入って出版された石井謙治の「日本の船」は、一般の読者でも読みこなせる、本格的な船の歴史書である。

船の歴史研究のバイブルと言ってもよいと思う。

語れば長くなるので、船の歴史に興味のある方のために、重宝するいくつかの書籍を下に列記する。

もちろん鋼船以前は全て木船であるから、日本列島の地形、気候、植生、国勢などが深く関係するが、ここでは割愛する。

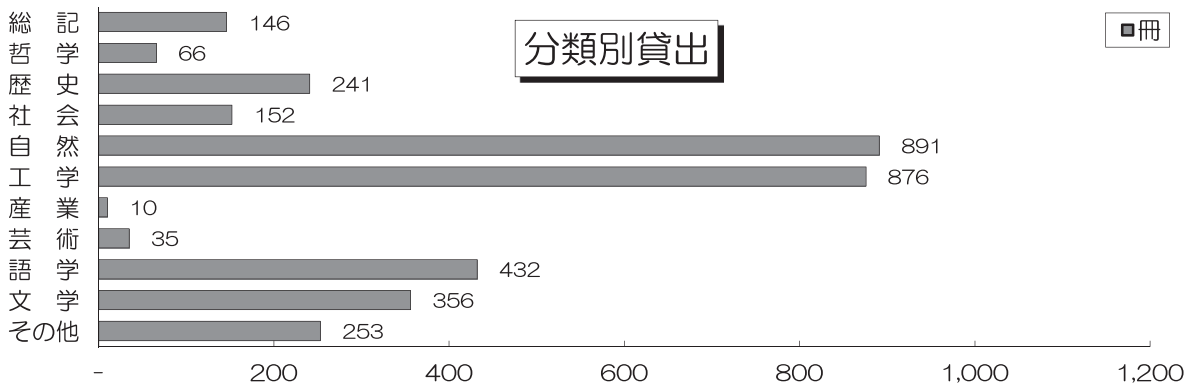
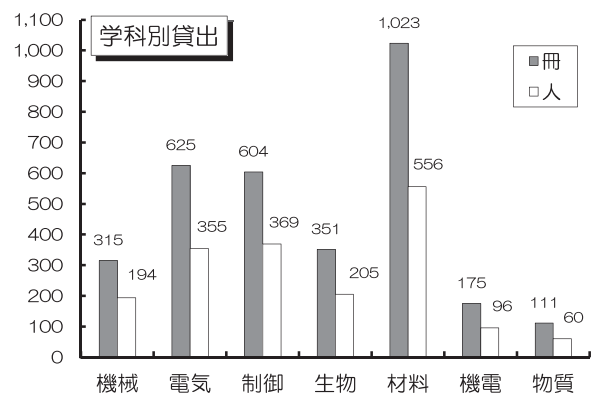
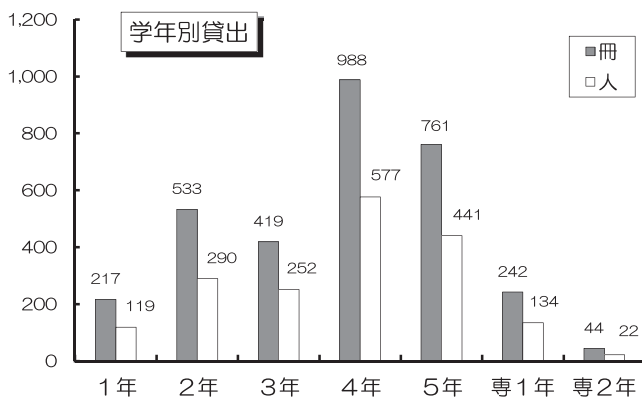
[書籍]

- (1) 金沢兼光：和漢船用集、1761.11。
- (2) 石井謙治：日本の船、創元社、1957.12。
- (3) 石塚尊俊：民俗資料による割舟の研究ーソリコ・モロタ・トモドを重点として、日本民家集落博物館彙報Ⅲ、日本民家集落博物館、1960.12。
- (4) 川崎晃稔：薩南諸島の割舟製作習俗聞書、南島民俗研究会、1976.6。
- (5) 須藤利一編：船 ものと人間の文化史1、法政大学出版社、1977.5。
- (6) 茂在寅男：古代日本の航海術、小学館創造選書、1979.7。
- (7) 堀内雅文：大和型船 [航海技術編][船体・船道具編]、成山堂、1982.9、2001.9。
- (8) 石井謙治：図説 和船史話、日本海事史話叢書1、至誠堂、1983.7。
- (9) 川崎晃稔：日本丸木舟の研究、法政大学出版社、1991.2。
- (10) 松枝正根：古代日本の軍事航海史（上・中・下）、かや書房、1993.9。
- (11) 石井謙治：和船ⅠⅡ ものと人間の文化史76ーⅠⅡ、法政大学出版社、1995.7。
- (12) 由良 勇：北海道の丸木舟、マルヨシ印刷株式会社、1995.7。
- (13) 安達裕之：日本の船 和船編、船の科学館、1998.3。
- (14) 出口昌子：丸木舟 ものと人間の文化史98、法政大学出版社、2001.2。
- (15) 山形欣也：歴史の海を渡る 中国造船技術の航跡、農山漁村文化協会、2004.4。
- (16) 吉川金次：鋸 ものと人間の文化史18、法政大学出版社、2012.4。

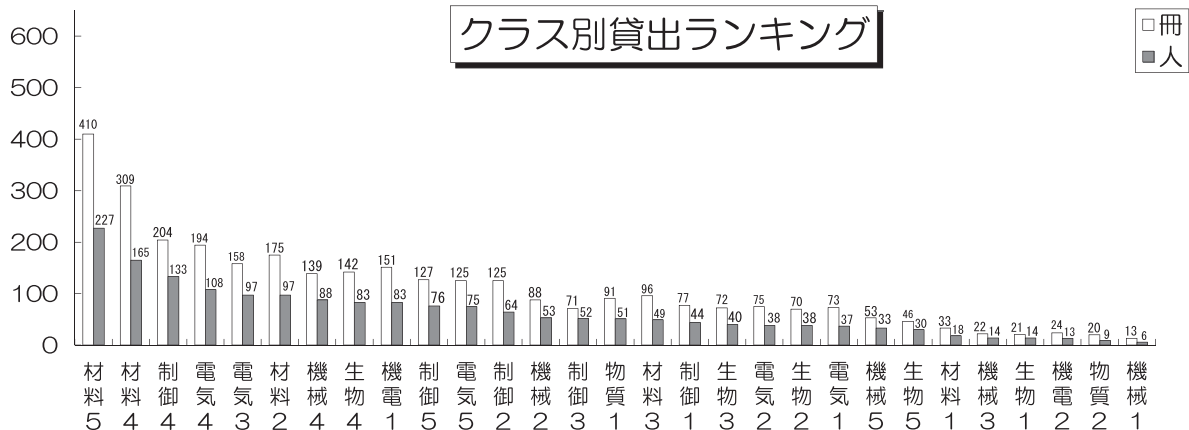
平成25年度後期 図書館利用状況

◆開館日数及び入館者数

月	開館日数	入館者数				一般利用者数 (内数)	一日平均入館者数 (四捨五入)	開館時間
		平日		土曜日	合計			
		時間内	時間外					
10	26	2,641	356	193	3,190	11	123	平日(時間内) 9時～17時
11	23	2,475	872	164	3,511	25	153	平日(時間外) 17時～20時
12	20	2,330	548	83	2,961	14	148	土曜日 9時～17時
1	19	2,919	835	0	3,754	9	198	
2	23	3,236	707	295	4,238	13	184	
3	23	1,383	137	139	1,659	10	72	
合計	134	14,984	3,455	874	19,313	82	145	



※ 分類別貸出冊数には、教職員及び一般利用者貸出冊数を含む。



information

夏季休業中の、開館時間の変更及び臨時閉館にはご注意ください。



◆特別(長期)貸出について

夏季休業中の特別(長期)貸出を下記のとおり行います。

- ・貸出期間 : 7月16日(水)から8月29日(金)まで
- ・返却期日 : 9月12日(金)
- ・貸出冊数 : 5冊以内

(一般利用者及び教職員は通常貸出です。)

◆開館時間の変更及び休館日について

夏季休業期間中は、下記のとおりです。。

- ・月曜日～金曜日は、9時から17時まで開館
- ・土、日曜、祝日及び8月1日(金)、8月13日(水)～15日(金)は休館です。



◆◆図書館からのお願い◆◆

- ・図書は返却日までに返却してください。
- ・閲覧室での飲食は禁止です。
- ・閲覧室内での携帯電話の使用できません。
- ・閲覧室内での騒がしい行為・会話は禁止です。

《編集後記》

なんとか図書館だより84号をお届けすることができたようです。本号も先生方や学生諸君に、図書にまつわる体験などを書いていただいています。楽しんでいただけたでしょうか。皆さんの、今後の読書の参考になれば、図書館だより作成に携わった者として、幸いです。

既にご存知の方も多いでしょうが、今年度も夏休みの初日(7月23日)にブックハンティングを行います。自分が読みたい本を、本屋で直接選ぶことができます。募集

は10名程度です。興味ある学生諸君は申し込んで下さい。

図書館は改修によって情報センターとして生まれ変わり、本の閲覧だけではなく幅広い利用が可能となりました。皆さんに有効に使って頂けるよう、改善に努めていきたいと思っております。そのためにも、図書館の利用について、また、読みたい図書についてなど、ご要望をお寄せください。今後の活動の参考にさせていただきます。

(編集委員長 山崎 有司)

発行日：平成26年7月7日

発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館 Tel：0942-35-9306
〒830-8555 久留米市小森野一丁目1番1号
E-mail：L-staff.SAD@ON.kurume-nct.ac.jp